

H・ブロッホの「シンボル論」について

中 村 善 一

1. シンボルの復権

今さら事改めて「^{シンボル}象徴」を論ずる必要があるのか、という考えもあるだろう。事実、「象徴」ということばは、古くからひろく種々の領域において、さまざまの意味合いで使用されてきた。このことばの内包するところは、歴史的にも一定していない。われわれの時代はしかし、「シンボルを認識の道具という資格で復権¹⁾」させたのである。エリアーデによれば、「シンボル」は、「19世紀の合理主義、実証主義および科学主義に対する反動の一部をなしているものであり、既に20世紀の四半世紀を充分特徴づけている²⁾」のである。またランガーによれば、シンボルという観念の中にこそ、人文的な諸問題のすべてを解明するための新しい鍵が秘められているのであり、「心性」についての、新しい基調が発見できる、という。「この考え方は伝統的な『科学的方法』の行ってきたように、生命と意識の問題をあいまいにするのではなく、それに光を投ずることができる」のであり、「感覚与件の究極性が前の時代の手がかりであったのと同様に、シンボルの力が次代の手がかり³⁾」として評価される。

これはカッシーラーが人間を「animal symbolicum (象徴的動物)⁴⁾」と定義する思想と一致している。象徴的動物としての人間は、自分自身の深い分裂、解決不能の葛藤、秩序ある世界体系に対する欲求など、さまざまの問題を新たな意識水準つまりシンボル段階へと移し入れることによって、理想的な解決を求めようとする。統一的な世界像を獲得しようとする

人間の本源的な欲求は、科学的な世界観、哲学、宗教そして芸術などにその問題解決の方途を発見しようとする。これらのさまざまの方策のなかでも特に「芸術」は、きわめてシンボリック思考の色合いが濃いものである。芸術作品は、それが意味を担うものであり、「意識的、無意識的な両方の性質を帯び、なおかつ純粹に知的な用語で判然と定め難いという点で」⁵⁾、まさにシンボルである。

ヘルマン・ブロッホもまた、「人間の天性とは文化のことであり、まさに象徴言語を用いる能力以外のなにものでもない」⁶⁾、と考えている。人間は、自分自身と自己の存在の構造とを絶えずシンボル化しようとする存在である。そして文学に課せられた使命は、常に新しい世界形式を創造することであり、この使命は文学の存在理由を支えるものとさえ考えられるが、こういう文学的創造行為は、「象徴の形態化と可視化として、象徴秩序として、象徴の本質性の『具象』として成就される。」(GW6.S.140) ブロッホにとってシンボルとは、現実と詩的創造性との内的な融合によって生じるものである。このシンボルは、世界の現実と接触し、また現実干渉することによって、新しい詩的知識となり、詩的創造の端緒となる。シンボルは、可視的な形態として、具象的な形姿に形づくられる。詩人は、象徴言語という世界を所有することによって、現実の世界の他に第二の言語的シンボルの世界を所有する。シンボリック言語の内部には外的現実が保存されているのであり、この現実が詩的創造力によって再度シンボル化されて、「次のより高い次元でいま一度（それも『内容的に』）保存される。」(GW6.S.139) 問題は、現実世界とシンボルとの間の相互作用であり、現実に関与させることによって、現実を認識のための形態に形成し直すことである。ここで形態の形成とは、まさに認識の拡大に他ならないのである。

もともと人間の認識作用の出発点は、感覚作用である。人間の感覚器官になんらかの刺激を与えないものは、認識の対象にはなり得ない。感覚器

官にとらえられない対象は、ある意味で存在しないのである。しかも問題は、人間の感覚器官の働きが、かなり独断的で恣意的であるということである。われわれは日常われわれの感覚器官に働きかけるすべての刺激を等価値に保持するわけではない。カメラという器械は、一定範囲内のすべての刺激をそのフィルムに感光させるが、われわれの意識は、感覚器官の受け取るすべての刺激を選択した後に保持する。友達と遊びに夢中になっている子供は、仲間同志の話題には敏感に反応するが、親の呼び声や5時のサイレンは聞いていない。感覚器官はさまざまな刺激に同じ反応は示さず、選択という抽象化作用の後に意識に送り込んでくる。この意識に送り込まれてきた感覚内容は、ある方向づけに従って一定のまとまりを持ち、意味を有し、価値を形成する。人間の意識の内部で選択され抽象化されたこの一定のまとまりが、シンボルとなるのであり、このまとまりの形成がシンボル化作用である。

上のように意識の内部で行なわれるシンボリック思考は、論弁的な理性に先立つものであり、言語以前の行為であり、人間の思考のいわば伏流をなしている。シンボリック思考は、他のどのような認識方法（概念的で客観的な方法）も把握し得ないような、人間存在の奥深い無意識で非理性的な諸側面をも明るみに出す。シンボルは、「心の場合的な創造物ではない。それらはある必要性に込められているのだし、また、ある機能を果してもいるのである。つまり、存在の最も内密な様態を剥き出しにしてみせるのだ。」⁷⁾シンボルは概念をも内包するが⁸⁾、シンボルの内容は概念的には表現され得ない。人間とさまざまな事象の究極の实在は、必ずしも論理的整合的に顕現するとは限らないから、それらは概念によって把握し得るとは限らないが、シンボリック思考によってそれらの様態に接近することは可能となる。しかもシンボルは概念を内包している。いったん獲得された概念は、他の概念と関係づけることが可能になる。この概念相互の関係づけは、認識の拡大を意味するのであり、シンボルは結局人間の現実把握力の増大を意味

することになり、世界をその全体性の縮図において見ることを可能にする。

世界の全体性の縮図を作り上げようとする芸術作品。そこにみられることばやイメージは、その直接的な意味以上の何かを保有している。そこには無意識の側面、夢の形象が存在しているのであって、これらの諸要素は、正確に定義づけられず、また矛盾なしに説明されることもない。「人間の理解の範囲を超えるものは無数に存在しているので、われわれは定義もできず、完全に理解もできない概念を表わすために、常に象徴的な用語を用いている。⁹⁾」人間の自我には、意識的な知識では捉えることのできない「もう一つの面」が存在する。これは、たとえば夢のなかに、その夢をみた人の個人的な経験やその人個人の生活からは説明できない心の様態を表現する要素が現われる、という事実にもみられる。これらの要素を、フロイトは「古代の残存物」と呼んだし、ユングは「元型」とか「原始心像」と呼んで¹⁰⁾いる。ブロッホもまた、人間の実存の真の象徴を捉えるためには、人間の根本構造を最も包括的に表現するたとえば「原－神話」としての象徴に逢着するという。それはいわば人間の根本的な全体的象徴化を果し得るものとして理解される。「人間がたとえどのように自己を表現しようとも、どのような象徴においてそれを行なおうとも、その象徴は否定しがたく神話類型とロゴスによって彩られていて、象徴の根本構造はこの両者の分ちがたい結合によって規定されている、こうしてその象徴は人間精神と人間の魂の根本構造を同時に反映し、人間と人間との間の意志疎通の手段に、唯一の了解手段になる。」(GW6.S.283)

しかし科学主義の恩恵に浴し科学主義の枠内から抜け切ることのできないでいるわれわれ 20 世紀の人間にとっては、シンボルの思考とその様相は、きわめて取り扱いにくいものである。シンボルは、必ずしも論理的知性的に把握し定義づけられないからである。その存在の事実は否定できないのであるが、その存在の事実をわれわれのなれ親しんだやり方によって

は必ずしも明確に確認できないからである。せまい科学主義的精神を超えることが必要なのである。かつての人間の意識的な心が、一定の心の様態において統合することができていたかも知れない、全体的な世界についての形象は、我々には失われている。往時の神話的ないし宗教的統一はない。この喪失を、日常生活の時々において、われわれは夢の象徴によって補償しようとしているのかも知れないし、芸術家は芸術的なシンボルによる形象の創造によって代行しようとする。この場合シンボルは、個別的事物の遍在とカオスを調和させ、再統合するための心の自動的機能を果す。芸術は、意識を超えた世界を形象し、全体性の把握をめざすものとして、シンボルを復権させることになる。

注 1) エリアーデ著作集第4巻、前田耕作訳『イメージとシンボル』、せりか書房1976年、12頁。

2) 同書、11頁。

3) S. K. ランガー著、矢野・池上・貴志・近藤訳、『シンボルの哲学』、岩波書店1960年、23,27頁。

4) E. カッシーラー著、宮城音彌訳、『人間』、岩波書店1953年、37頁。

5) A. ストー著、河合隼雄訳、『ユング』、岩波書店1978年、172頁。

6) Hermann Broch, *Gesammelte Werke in 10 Bänden*, Zürich (Rhein) 1952-1961, Bd. 6 S. 278

なお、以下においてブロッホの全集よりの引用は、本文中にその巻数とページを略記する。引用文で翻訳のある場合は、その訳文を使用させていただいた。次の三冊の翻訳書である。菊盛英夫訳『ホーフマンスタールとその時代』、筑摩書房1971、入野田真右訳『崩壊時代の文学』、河出書房1973年、入野田真右訳『知られざる偉大さ』、河出書房1975年。

7) エリアーデ著、前掲書、7頁。

8) A. ストー著、岡崎康一訳、『創造のダイナミックス』、晶文社1976年、198頁参照。

9) C. G. ユング他著、河合隼雄監訳、『人間と象徴』上巻、20頁。

10) 同書、99頁参照。

2. シンボルとしての長編小説

ブロッホの作品中には、Symbol という語（形容詞となることも多い）が、しばしば見いだされる。これは彼がシンボルに多大の関心を持っていることの証明であり、彼の哲学に「シンボル」が占める比重の大きいことを示している。この小論においてはしかし特に、ライン版ブロッホ全集第7巻 *Erkennen und Handeln* に収録されている *Erwägungen zum Problem des Kulturtodes* (1936) と *Über syntaktische und kognitive Einheiten* (1946)、および第10巻 *Die unbekannte Größe* に収められている *Bemerkungen zu den "Tierkreis-Erzählungen"* (1933) を参考にして、ブロッホのシンボル論を追求して行きたい。

まず最初に問題にしなければならないのは、シンボリック思考の認識対象である。最終的には長編小説として完成するシンボル形成物の端緒となっているのは何であろうか。すなわち論弁的な理性以前、言語化される以前の、主体の関心はどこに向けられるのか、という問題である（いわゆる「シンボルのシンボル化」という過程はこの部分では一応問題外として）。それは一口で言ってしまえば、ブロッホの場合、世界の、あるいはある一つの時代の、「全体性」に向けられるまなざしであり、「普遍的なもの」への関心である。それはまた、人間の「相貌的経験」への着目と言ってもよいだろう。

「全体性」の追求は、ブロッホの次のような信念に基くものである。すなわち、「文学、もっと正しく言えば文芸作品は、その統一のうちに全体世界を捕えなければなりませんし、現実語彙の選択のうちに世界の宇宙進化論を反映しなければなりません。」(GW6. S.236) これは、世界の全体

をその統一的な像において見渡そうとする願望、いわば神話的な統一世界として世界のすべてを捕捉しようとする願望に発するものである。このような「全体性」は、一体どのようにして捉えられるのか。ある一つの時代（時期）の世界の全体性は、他のもう一つの別の時代と対決させることによって明瞭になる、とブロッホは言う（Vgl. GW7.S.103~110）。一つの時代を漠然とながめた時、それは見極め難い把握不能の集塊にすぎない。一つの総体として語り得ない、捉え所のない活動の無秩序な流れにすぎない。無名無数の人間存在と、不特定多数の人間の行為があり、さまざまの事実ともろもろの思想の坩堝である。この混沌とした時代を「見渡し」、その「時代精神」をつかみ取るには、この特定の時代をもう一つの別の時代と対決させることが必要となる。有機的な無名性の全体的性格を確認するためには、これと、ある種の精神的リアリティーとを対決させることが必須となる。超現実的な理念を無名性に被せてみることは、いわば神秘的な諸観念の追試を行なうわけである。ここに、一つの時代の真のリアリティーが浮かび上がってくる。一つの時代の精神を、歴史の神秘的構想が推論する。この神秘的構想は、時代を超越したものであり、ロゴスの無時間性に支えられているものである。このようなやり方はしかし、しばしば独断的、唯美主義的であるとして非難されるのであるが、他の方法によっては達成不可能な、一連の認識の全体性を獲得するための企てである。この方法によって、それなりの、普遍的で集合的な全体性が構成されることになる。それは、「生の合理、不合理を問わない、いっさいの要素の合一」（GW6.S.237）である。精神の自律的な創造そのもののうちに完成される「像-世界（Bild-Welt）」としてのシンボリックな表現が達成される。時代精神が発する雑多な言語的コーラスの総体を表現し得るものは、シンボル以外になく、その表現の場は芸術以外にはない。「もし芸術になんらかの意味があるとすれば、それはなによりもまず、限られた数のモチーフで全体性を表現することができるという点にある。」（GW10.S.191）

ブロッホは、『ホーフマンスタールとその時代』、『ジェームス・ジョイスと現代』といった論文を書いているが、この論文のタイトルに「その時代」、「現代」ということばが使用されているのは意味のないことではない。「その時代」や「現代」というものの全体性、その時代精神を追求し確認しようとする彼の意図の現われに他ならない。

次にもう一つ、シンボリック思考にとって重要な対象となっているのが、「普遍的なもの」である。それは、人間全体の超個人的な集合的無意識の投影したもの、元始的で、人間が遺伝的に受けついで、心の深層の形態である。それはユングの「神話類型」によって表わされているところのものであり、人間精神の根源構造についての認識であるが、この小論においては、この問題についてこれ以上は触れないことにする²⁾。

いずれにしても、ブロッホがシンボリック思考の対象とするものは、たんに美学的なものに止どまるのではなくて、絶対的なものにまで及ぶ。しかしこの「絶対的なもの」は、「仮説的な認識の消尽点としてのみ、構成としてのみ存在し得る³⁾。」人間の認識はつねに絶対点へ到る途上にあるということをつつも意識すること、この意識が、ブロッホの長編小説論の基本である。「常に創造とは認識の焦燥」(GW6.S.237)なのであるから。

ブロッホにとって、長編小説とは、世界ないしはある一定の時代の「全体性」と人間にとっての「普遍的なもの」についての認識の総体とを、シンボリックに表現するものである。しかもこの認識の方法は、いわばシンボリック認識である。

E. カッシーラーによれば、認識とは、さまざまな個別科学の認知的成果の総体であり、個々の認識体系の個別的独自の存在ではなく、全体として大観しうる、一つのものでなければならない。認識は、多様なもの個別的なものに一つの形を与える形成作用なのである。「あらゆる認識は、その進む道や方向がいかにかにさまざまであろうとも、終局的には現象の数多性〔多〕を『根拠律』の統一性〔一〕のもとにもたらすことを目指してい

る。個別的なるものは個別的なるものとしてとどまっていたはず、ある連関の中に組み込まなければならない。その連関の中で個別は、論理的、あるいは目的論的、あるいは因果的な『構造』の一分枝となるのである。認識とは本来、この本質的な目標——特殊的なものを一つの普遍的な法則および秩序の形式のうちにはめこむこと——に向っているものである。⁴⁾」認識に対するこのような要請に答えうる方法は存在するのであろうか。個別化し細分化した種々の「学問」の諸成果は、例外のない一般理論として、一つの認識体系に統合され得るのかどうか。カッシーラーは、従来とは別の方向にこの問題の解決の道を見い出す。「科学的概念の体系の内部に示され、働いているこの知的総合という形式のほかに、精神的生命全体のうちには別の仕方の形成作用がある⁵⁾」、と考える。この形成作用もまた、個別的実在の客観化なのであり、普遍化である。ただ、この形成作用は、その根源的機能において科学的な論理的概念と法則のみに依存するのではなく、「独創的に像をつくる力を内にもつ⁶⁾」という特徴をもっている。これが「^{シンボル}象徴形式」による形成作用である。シンボルは、あらゆる形成作用に際してその機能を発揮するものであり、さまざまな客体の個別的で特殊な性格を保存するものであり、認識の媒介物として評価されることになる。人間の表象や思考のいわば中間項として、シンボルはその存在の意義を有するのであり、独断的な形而上学が果し得ない、統一性と普遍性とを獲得するための媒介物と考えられる。「言語や芸術や神話の中に働いている意識のシンボリック機能において、意識の流れの中からはじめて、一部分概念的、一部分直観的な性質の、ある不変的な根本形象が浮び出てくる。うつろいゆく内容に代わって、自己完結的な持続的な形式の統一⁷⁾があらわれてくるのである。」シンボルはしかも、ただ完成したものとして一定の思想やある特定の表象を内容として仲介するという作用を持つだけではなく、この内容そのものが、シンボルによって創造され構成される。シンボルはつねに新しい形象を作り出す。シンボルは、意識の全体か

ら抽出されるものでありながら、同時にその全体を代表的に表現するのであり、その全体を再現し得るものとなる。さまざまな感覚的諸印象の情報は、シンボルによって、統一的総括的な形態として定着させられる。このシンボルを担うもの、たとえば長編小説は、この意味において、一つの認識体系となるのであり、存在に対する普遍的な形成作用の場となる。

長編小説は、こうしていわば世界象徴ともなる。シンボルとしての長編小説は、科学によってはおそらくは到達できない目標、つまり認識の全体性が獲得され得るものと考えられ、理性的な知識が参入し得ない領域にまで到達し得る包括的な負担能力を持ったものと評価される。小説中の諸形象が、シンボルとしての諸内容をそのリアリティーとして保持するのであり、時代のリアリティーをつねに創造し続ける。長編小説は、それなりに新しい、それに特有なシンタックスと論理とにおいて、「その自律的な領域の意味と真実と象徴価値とを獲得する。」(GW6.S.227) 小説の作者はだから、自然主義的な技法すなわち外的事象の細部をただたんに描写したり、模倣したりすることに専念するだけではなく、無意識的な現象から純粋な思考内容までの全段階を作品中に盛り込まなければならない。外的事象の描写と登場人物の思想のみならず、一般的な論理の側面、すなわち認識論的な注釈としての役割をも果さなければならない(Vgl. GW10.S.193)。シンボル形式としての長編小説は、既存の現実や所与の現実の再現ではなく、全体としての人間と諸々の事物についての客観的な見解を確立するための一方法である。それは世界についての抽象化された現実を発見するための技法であり、発見された現実を一定のリアリティーとして表現するものである。シンボルの働きは、ここでは凝縮化と集中化としての作用をも果すのであり、「多様の統一⁸⁾」を果す。長編小説は、シンボルの言語の総体であり、「主観的現実に関する観念のシンボル化⁹⁾」なのである。

- 注 1) カッシーラー著、『人間』, 109 頁。
2) 神話論については, 拙稿『H・ブロッホにおける神話と文学』および『抒情的自我と神話的なもの』(千葉敬愛経済大学研究論集, 第 13 号 1977・第 11 号 1976) を参照されたい。
3) Bruno Hillebrand, *Theorie des Romans II. Von Hegel bis Handke*, München(Winkler)1972, S. 144
4) E・カッシーラー著, 生松敬三他訳, 『象徴形式の哲学Ⅰ. 言語』, 竹内書店 1972 年, 10 頁。
5) 同書, 同所。
6) 同書, 同所。
7) 同書, 29 頁。
8) カッシーラー著, 『人間』, 203 頁。
9) S・K・ランガー著, 大久保・長田・塚本・柳内訳, 『感情と形式』, 大陽社昭和 45 年, 640 頁。

3. シンボルのメカニズム

シンボルのメカニズムを解明するために, ブロッホはつぎのような三つの術語を使用する。すなわち「認知的統一体 (Kognitive Einheiten) 」, 「シンタックス統一体 (Syntaktische Einheiten) 」それに「形相的統一体 (Eidetische Einheiten) 」(GW7.S.151ff.)である。

認識とは, ブロッホにとって, シンボルの思考によって形成され達成されるものであることは, すでに確認したのであるが, この認識は, その本来的性格からしてつねに表現を内包しているのであって, 認識体系は表現体系へと移行することになる。しかしながらシンボルは, 対象についての表象を担うものであり, シンボルの内包は必ず表象化されるが, シンボルの表象するのは「意味」であって, 事物ではない¹⁾。シンボルそのものは, 物理的な実在世界における, 具体的な現実の存在物ではない。シンボルはただ「意味」を担っているだけである。「それは, 時間のどんな瞬間にも存在せず, 空間のどの点にも存在しない。それは『どこにもない』のであ

る。しかし、この『どこにもない』という考えが、テストにたえたわけであり、近代社会の発展において、その力を証明したのである。²⁾ シンボルそのものは、世界を一定の形態をもったものとして展望するために、人間の認識に対する渴望が作り上げた観念上の創造物であって、現実の事物とは必ずしも対応関係を持っていない。しかし、この対応関係がないにもかかわらず、あるいはないが故にこそ、シンボルの形象世界は完全に自己完結的なのである。シンボル形象は、みずから意味と意義とを有したものとして、価値を形成し、全体世界の抽象的な一分節を構成する。シンボルの担う「意味」はしかし多くの場合、直接的には言語化され得ず、シンボル表象を担うにふさわしい表現を発見しなければならない。

シンボル形象を表現として完成するに際して、その表現体の形成図式の要となるのが、「認知的統一体」と「シンタックス統一体」である。

ここでブロッホの言う「認知的統一体」とは、シンボルの表象する意味であり、表現しようとする主体によってすでに確認され獲得されているシンボル形成物としての一定の認識そのものであるが、しかし依然として前言語的段階にある。これはまた前章において、「全体性」、「普遍的なもの」、あるいは「相貌的経験」と呼ばれていたものでもある。「認知的統一体」はしかし、言語化され表現として完成されることによって、他人にも伝達され得るものに成らなければならない。それは、主体の領域から出ていわば「聞きうるもの見うるもの」(GW7.S.153)に形成されなければならない。「認知的統一体」そのものは、人間の前知識 (Vor-Wissen)、人間の内部にある先天的なもの、あるいは無意識的なものが、論理と協働して作り上げたものであって、非経験論的な性格を持ったものである。経験論的ないしは実証主義的な解明は不可能である。

以上のような「認知的統一体」を、一定の表現に造形して他人にも伝達可能にするのが、「言語」である。言語そのものにはしかし、言語独自の認知的な自律的論理が働き、自律的な活動が支配する。この言語が「認知

「統一体」を担うという課題を遂行するために必要とする形態が、シンタックスであり、シンタックスの複合体である。最小の「シンタックス統一体」は、文章であり文章はさらに高次の統一体、すなわち段落や章ないしは部となり、終局的には一つの文芸作品として完成する。「シンタックス統一体」は、認知的活動の表現であるが、より高次の統一体が、それよりも低次の統一体に対して、必ずしも可逆的な進展をみせるわけではない。高次の統一体は、低次のそれらの集合体ではあるが、低次の統一体のそれぞれは、それ自体で一つの独自の存在である。低次統一体のそれぞれの存在は、高次統一体の枠内における、時間的で動的な変化と進展のその時々記述にすぎないのであって、あくまでも個別的存在である。シンボルが表現されたものとしての「シンタックス統一体」は、最低次の統一体であれ、中途的段階のそれであれ、それぞれが独自にシンボル形象を担い、さまざまなシンボル系列の交叉の中でのいわば中間項を形成している (Vgl. GW7.S.160)。

「認知的統一体」を端初として、最高次の「シンタックス統一体」としての文芸作品（長編小説）にまで完成する、シンボル形象の一連の発展過程において、シンボル思考とシンボル形象を担う第三の概念が、「形相的統一体」である。この「形相的統一体」という概念が、ブロッホのシンボル論の中心を占める重要概念であると思われる。

「ある特定の世界断片、つまり空間と時間のある特定の場に局限されていて、その存続については『全体』として把握されるところのある特定の外的もしくは内的な世界断片と関連しているもの、これが形相的統一体である。この種の世界の断片が完全に切り離され得るとすれば、この世界断片は、特にただ一定の瞬間だけ存続するものである場合、そのもの自体は変化のないものとしてみなされ得るであろうし、変化のないある程度まで完全に静的な『情況』とみなされる、だからそれは『基本的情況』と称され得るであろう。」(GW7.S.154) 世界の一断片としての切子面

(Facette) , 多面体としての全体世界の中のある特定の一切子面の相貌的性質ないしは本質を, 「基本的情況」として取らえるのがこの「形相的統一體」である。それは, 仮説的な世界モデルである。

「基本的情況」を内包している一定の「形相的統一體」に対して, その等価物としてある別の精神的リアリィティーないしは基本的範例を対置してみるのである。超現実的な理念ないしは既存のある一定の構築物とこの基本的情況を対決させるのである。さらに言えば, 一つの形相的統一體を別の形相的統一體と比較してみるのである。この時「形相的統一體」は, この新たな対置物を受け入れることによって, そこに新たな情況が生じ, 新たな文章構造を生み出すことになる。「内的な文章動力学と外的な文章静力学とが一体とな³⁾て」, 基本的情況の新たな進展に比例して, 新たな文章構造が形成される。ここに形成された文章構造は, その動詞の動的性質にもかかわらず, その瞬間的全体性において時間をも止揚する静的な「シンタックス統一體」として, 次の段階の「形相的統一體」の表現基体となる⁴⁾。閉鎖的で静的な「形相的統一體」は, 上のような行為の繰り返しの結果, いわゆるより高次の統一體へと移行する。「形相的統一體」は, 静的にシンタックス統一體を内包するものであると同時に, 動的に次の新たな基本的情況をも取り込んでゆく受容器的な働きもする。したがって, 「形相的統一體」にも, 低次のそれと高次のものとがあり得るのであり, 最高次の統一體へと連結している。一つの切子面の本質を捉える「形相的統一體」, 複数の切子面のための「形相的統一體」, そして多面体としての全体世界の相貌的性質を抽象的に捉える最高次の「形相的統一體」などさまざまな段階のものが考えられる。

「形相的統一體」は, 「認知的統一體」に発するさまざまな段階さまざまな種類の「シンタックス統一體」のすべてを方向づけ, 統括し, 価値づける。それは, 「シンタックス統一體」の規範であると同時に, 「シンタックス統一體」のすべてが協働して到達すべき目標でもある。作者の最終

的な認識と形象とを、あますところなく理想的に表現し得た場合の表象の全体を担うもの、さまざまの事実のなかから「非時空的、一般的、必然的な本質」を取り出してそれに客観的な形式を付与しようとするものである。それはまた、「その計画のうちに観念として存在し、素材を得て現実⁵⁾に存在するようになるもの」であると考えれば、「形相的統一体」とは、認知的統一体とシンタックス統一体という素材を取り込むことによって、一個の文芸作品ないしはその文芸作品を支える理念を生み出すための、創造的観念であるとも言える。

ここでブロッホの使用する三つの概念の関連性を、「形相的統一体」を中心に整理確認してみよう。

「認知的統一体」という概念からみれば、認知的内容すなわち一定の認識内容を持った言語構造は、シンタックスとしての構造と形態を得て結晶する場を必要とするが、この場となり得るのが、「認知的統一体」の発展的変形態としての「形相的統一体」である。「意図的な認識によってシンタックス統一体と行を共にすることになるこのような典型的な認知的統一体は、その実状に応じて、形相的統一体と呼ばれるべきである。」(GW7.S.154) 結局この場合の「形相的統一体」とは、認識内容がその形式を得て、認知的形態が生成発展したものである。さらにまた、「シンタックス統一体」という概念からみれば、「シンタックス統一体」と「形相的統一体」とは、一見すると同じ内容の重複に見える。事実、実証的な観点からすれば、この両者はいわば異語同義であって、両者の違いは仮説としてのみ観念的に措定されている。実際ブロッホの理想は、最高次のシンタックス統一体が形相的統一体と一致することである。この両者が一致するということは、表現上の理想が達成されることであり、長編小説がプラトンのイデーの世界を実現するということでもある。しかし実際には、この両者が完全な一致をみることは不可能に近い。ブロッホによれば、ジョ

イスが『ユリシーズ』の最終章においてのみこれに成功しているという。「認知的統一体」が「シンタックス統一体」という形態に成長し、可能な限り完全で可逆的な関係になり得るようにと接近する目標が、この「形相的統一体」である。シンタックスの統一体の意図的な積み重ねと結合とが、「形相的統一体」の完成として是認され得れば、それは表現の全き完成となる。「形相的統一体」は、シンタックスの統一体の論理的な統合体であり、言語的統一とその完成が得られる場所である(Vgl.GW7.S.155f.)。さまざまなシンタックスの統一体の全体は、「形相的統一体」を通じて認識という方向づけを得て整合的な一定の表現としての完成に到る。結局「形相的統一体」は、「認知的統一体」よりもまた「シンタックス統一体」よりも、より上位の概念である。これら両者を最終的に主導し統合するのであるから。

ブロッホは、「形相的統一体」の存在を証明するために執拗に論理を展開してゆくが、この存在証明の手がかりとして利用されるのが数学⁶⁾である。「数学は、『特性を有さない諸事物』相互間のあらゆる可能なる関連性の総体についての学問」(GW7.S.163)である。数学は、純粹に演繹的操作の反復によって進展する完全な可逆性の支配する体系である。数学的演繹の過程が叙述される場合、その思考と表現とは完全に一致する。数学上の言語表現は完全な可逆性が支配する言語であり、その体系には未知なるものの剰余は存在しない。それは完全に自己充足的であるから、シンボル化され得ないし、シンボル化する必要がない。これに対して、ブロッホの言う「形相的統一体」は、「特性を有する事物」に関連するものであり、特性的内容はすべて特性なきものに解消できるわけではないから、そこに「内容的剰余」、いわば「実存的な付加分(Existenz-Plus)」が残存する。認識論的な無意識の領域ないしは先天的なものが沈殿している。この剰余物、剰余部分は、概念的に表現することができないものであり、直

●●●
 接的な言語表現と一致し得ないものである。これらは、「形相的統一性」の存在が承認された場合にのみ、その本質的特性を失なうことなく、そこに内包され保存される。逆に見れば、「この剰余がなければ、形相的なものは言語表現のたんなる重複にすぎないし、なんら現実の独自の存在にも成り得ないものになってしまう。」(GW7.S.171) そしてこの概念的表現の不可能性こそが、「形相的統一性」の論理上の不可逆性の原因になっている。内容としての剰余を内包する「形相的統一性」を表現するための言語ないしシンタックスは、必ずしも概念的表現として完成せず、非理性的なものを存続させる。「言語が真の表現手段であるためには、言語が非理性的なものをただ理性化し尽せばよいというわけではないし、非理性的なものからその非理性的性格を抜き取ってしまえばよいというものでもない。言語はむしろ非理性的なものをそのもの自体として保持し続け、それを理性的なシンタックスの構造を通じて輝き出さしめなければならぬ⁷⁾。」それは、たとえば数学的な予見とは異質であり、理性的なもののみを担う言語表現が意味するものとは別物である。理性的な知識のみによっては到達し得ない認識の全体性を、一定の連関の中に組み込んで統一性を獲得しようとする形相的なものの組み合わせが、概念的言語とは別種の文章構造を形成する。そしてこの課題を果し得るのは「シンボル」である。シンボルは、非理性的なものを内包したままで、表現化を達成する。非理性的なものは、本来的には理性化されてから言語化されるのであるが、不可逆性という特徴を持ったシンボルは、非理性的なものを理性化することなく言語化し得るのである。形相的統一性の全内容が、表現として言語化されシンタックスの統一性として完成するのは、このようにシンボルの機能によるのであるが、このシンボルの働きおよびシンボルそのものは、論理的演繹的な操作によっては解明され得ない。シンボルは、非理性的な実存的付加分の存在とそれ故の不可逆性によって、シンタックスの統一性を特徴づけ、根本的な形象を担った自己完結的な形式的統一を構成する。

シンボルのメカニズムとは、もう一度言うと、認知的統一体がシンタックス統一体として完成するプロセスであり、この構造的推移のための観念上の基盤となりその形象の母体となるのが形相的統一体という非実在の観念的創造物であった。このプロセスはしかし、次のようなシンボルの繰り返しの過程としても説明され得る。すなわち、一定の認識対象がシンボルとしての形態を獲得し（＝認知的統一体）、これがまたさらにシンボル形象（＝形相的統一体）を経由して、より高次のシンボル（＝シンタックス統一体・形相的統一体）へと進展する。しかも中途的媒介物であり最終的目標体でもある形相的統一体は、低次のそれからより高次のそれへとシンボル化されている。つまり、シンボルの無限の連鎖、集合、連結さらには交叉が繰り返されているのである。この事実をブロッホは、「シンボルのシンボル化⁸⁾」と呼び、芸術的形態はシンボルの繰り返しと積み重ねによって獲得されるものであると考えている。それはまさに、「変動する現実の変動するこの経験、種々雑多な象徴系列相互間のこの間断ない交叉、言語の媒介物中に象徴系列がこのように不断に溶解すると同時に、言語が象徴系列の最も本質的な財としてそれらの象徴系列の溶解中から取り出されるという、このきわめて複雑・微妙な手法」(GW6.S.192)、なのである。

シンボルは、認識行為の方法としていわば委任主体として、認知的行為を遂行する。同時にまた、一定の認識されたる内容を担うものとしてのシンボルは、その表現体系においても一度シンボル化されるのである。シンボル形象は、つぎつぎとより高次の認識のための対象となるのであり、さまざまな段階のシンボルは、認識主体と認識対象との間に交互に位置づけられて、二重の機能を持つことになる。「創造力によるシンボリックな自我の拡大に基いている認識というものは、もう一度創造的行為の客体になるのでありもう一度シンボル化されるのである。そしてこの行為こそが、芸術作品の本源なのである。このような哲学的省察が、芸術作品を結局は

シンボルのシンボルと規定することになる。認識は、芸術作品における再度のシンボル化によって再現されるところの、いわば自我によって生み出される一種のシンボリックな世界財である。⁹⁾人間の表象や思考は、ますます複雑になり拡散してきているのであるが、これを一望のもとに見渡そうとするさまざまな試みの中間項としての体系を創造するのがシンボルである。シンボルは、さまざまな形象の統合的全体を、一定の像-世界として形成するものである。たんなる経験的な所与の反映ではなく、認識論的対象の追構成でもなく、シンボルは、それ自身のもつ自己完結的な独自の原則にしたがって、対象そのものを抽象的に造形する。

注 1) ランガー著、『シンボルの哲学』, 72 頁参照。

2) カッシーラー著、『人間』, 85 頁。

3) Ernestine Schlant, *Die Philosophie Hermann Brochs*, Bern (Francke) 1971, S. 80

4) Vgl. GW7.S.157 und Ernestine Schlant, a.a.O., S. 80f.

5) 平凡社版『哲学事典』, 昭和 46 年, 410 頁の「形相的」および 409 頁の「形相」の項参照。

6) ちなみにヘルマン・ブロッホは、文筆活動に入る前、数学者たらんと努力した時期がある。

7) Ernestine Schlant, a.a.O., S. 81f.

8) Vgl. GW7.S.235 und Ernestine Schlant, a.a.O., S. 90-97

なお、ブロッホは 1947 年 *Über Modelle* という論文を書いている。これは、彼の象徴論をさらに「モデル」という概念を導入して敷衍したものらしいが、残念ながら未発表である。(Schlant, a.a.O., S. 189 参照)。

9) Hermann Krapoth, *Dichtungen und Philosophie, Eine Studie zum Werk Hermann Brochs*, Bonn (Bouvier) 1971, S. 78

4. ブロッホにおけるシンボルの位置

ヘルマン・ブロッホは、その青年期においても若干の文学活動を行ってはいるが、本格的に文筆活動に入ったのは、1927 年 41 才の時であり、1

951年65才で亡命先のアメリカで死亡しているから、その著作活動の期間は20年強である。この間、「シンボル」と芸術作品との関係という問題においても、当然彼の思考の内部にはアクセントの移動がみられる¹⁾。

1930年代においてはすでにシンボルに関して、*Bemerkungen zu den "Tierkreis-Erzählungen"* が書かれているが、この時点では芸術は認識を担うものであり、認識を仲介するものであると考えられている。この場合、「シンボル」は、認識に奉仕するものであり、認識を表現化し、普遍化するものとして位置づけられている。そして、*Über syntaktische und kognitive Einheiten* が完成したのは1946年であり、シンボルに関する実践的で理論的な解明、シンボルのメカニズムを追求しようとする姿勢は、この40年代をまたなければならなかった。

30年代のブロッホの考えでは、シンボルを手段とする認識内容の獲得量によって、その芸術作品の成果が判断できるのであった。そしてこのシンボルの創作手法の中心となったのは、詩的隠喩であり、「オルフォイス的下降」の方法である。これは文学的なやり方として決して不自然なものではない。詩的沈潜によって、連続的な内的連想が追求されたのである。内的体験と外的体験との対応が確認され、シンボル形象の描写技法が追求された。「それ故問題は、体験の一致を獲得することなのである。この体験の一致があれば、すべてのモチーフ、最も単純な肉体的感情から最も明らかな永遠性と死の意識に至るまでのモチーフは、生き生きと協力し合い、遂には全体性が象徴化され、そして神の形姿が良心の裁きのうちに予感されうるようなあの一致へと次第に明白な形をとり始めるのである。」(GW10.S.192) これは、長編小説の創作のための、作者の基本的な考え方とその技法の確認である。30年代のブロッホのシンボル論は、文学的なものと特に長編小説の理念と、分ち難く結びついている。

もちろんこのような考え方が、その後小説家としてのブロッホからなくなってしまったわけではないし、否定されたわけでもない。しかし40年

代に入ってからブロッホのシンボル論は、認識論的な無意識の層を問題の前面に引き出してくる。詩的な内的体験の領域への関心が、観念論的・心理学的な地平へと移行する。彼のシンボル論は、芸術作品との関係領域を踏み越えて、純粋な哲学的領域にまで拡大される。事実、後年のアメリカにおけるブロッホは、認識論や集団心理学などの学問的研究に関心の重点を移して行く。

40年代のブロッホのシンボル論は、きわめて哲学的色彩の濃いものであり、幾人かの哲学者の影響も指摘し得るだろう。しかしながら、ブロッホの哲学は、そのシンボル論をも含めて、その根本においては芸術的現象に方向づけられている。芸術をその特権的な実例としてみずからの哲学的体系の中に位置づけるのであって、彼の哲学は結局のところ、芸術のための哲学として理解されてよいだろう²⁾。芸術というものの存在の基盤をより広い背景のなかに位置づけ、その意義を確認し、その機能をより有効ならしめるための、哲学的研究であったと考えられる。

1933年に書かれたブロッホの手紙には、「しかし私には、シンボルに関連して若干の認識論的なことどもについて発表してみたいという気が大いにあるのです。なぜかといいますと、カッシーラーのあの部厚い三冊の書物はきわめて不十分なものだからです。」(GW8.S.88)、と書かれている。三冊の部厚い本とは、もちろん1923年から1929年にかけて出版されたカッシーラーの『象徴形式の哲学 (*Die Philosophie der symbolischen Formen*)』3巻を指している。ブロッホのシンボル論は、この文章によっても明らかなようにカッシーラーの主著が出版されそれを読んだ後で書かれたものである。しかしこの小論の筆者には残念ながら、カッシーラーとブロッホのシンボル論を比較し両者の優劣を論ずる力はない。ブロッホがカッシーラーのそれを上回るシンボル論を仕上げたかどうかということは全く別問題として、ブロッホのシンボル論は、彼の長編小説の創作のための理念上のまた技法上のバックボーンとして、実作者の実践的シンボル

論として評価されてよいだろう。

ブロッホの考えている芸術的な認識の方法は、科学的認識方法からすれば、性急で独断的なものに見えるかも知れないが、そのめざすのは、世界の全体性の認識である。シンボルのヒエラルヒーが造形する「像-世界」の形成作用は、神の似姿としての創造的人間が、「認識の焦燥」に駆られての、世界措定的な行為である。ブロッホはだから、ただ唯美主義的に美的形象のみを追求する芸術、非倫理的な芸術を攻撃する。作家は、美的創造のみに従事するのではなく、倫理的善的に仕事をしなければならない、と言う。表現手段としての芸術は、徹底的にシンボルを担い続ける構造的特性を有しているのであり、それは、理性に矛盾するのではなく、理性の機能を補い、独創的な「像」を形成する。

注 1) Vgl. Ernestine Schlant, a.a.O., S.97ff.

2) Vgl. Hermann Krapoth, a.a.O., S.78